義肢装具体験イベント開催報告書

vol.01
2016.10

第1回『義肢装具体験イベント』

第1回となる「義肢装具体験イベント」を、平成28年9月10日(土)に東京都西東京市立保谷中学校にて開催いたしました。

当日は、学校公開の場を利用して1時間目～4時間目までの時間割で、

①「義肢装具士と、その仕事とは(講義)」
②「義肢・装具の装着体験」
③「義足ユーザーとの交流」
④「義肢装具触知体験(展示)」
⑤「パラリンピアンによる講演」

の5つのプログラムを、中学校1年生～3年生の生徒と特別支援学級、保護者、教職員を対象に実施いたしました。

主なプログラム

各学年約200名、特別支援学級約10名、総勢約600名の生徒達に、(一社)日本義肢装具士協会 東日本支部から、23名がスタッフとして対応しました。それぞれのプログラムについて解説いたします 。

講義「義肢装具士と、その仕事とは」

学年毎に、障がい者とその方々を支援する義肢装具士の職業について、理解を深めてもらう事を目的に講義をしました。また、講義に続いて代表の生徒をモデルに短下肢装具の採型デモンストレーションを実施しました。

ほとんどの生徒が初めて見る採型作業を興味津々に見入っていました。質疑応答では義肢装具や義肢装具士に関する沢山の質問があり、活発な意見交換が行われました。

＜講義の風景＞

＜生徒への採型デモンストレーション＞

義肢・装具装着体験

体験用装具や模擬義足、高齢者疑似体験キットや片麻痺体験キットを装着し、「障がい者・高齢者の動作」や「切断者の義足歩行」を体験して、「障がい者・高齢者」の身体的負担を体感することで、その理解とボランティアマインドの育成を目的としました。

高齢者・片麻痺者の疑似体験用装具を装着して畳から立ち上がったり、模擬義足を装着して生徒同士で支えあって歩いたりと、多くの生徒達は初めての体験に驚きと身体的負担の大変さを感じていました。
転倒等の危険性もあることから、スタッフや教員による補助と見守りを徹底しました。

＜模擬義足での歩行体験 ①＞

＜模擬義足での歩行体験 ②＞

義肢装具触知体験（義肢装具展示）

義肢と装具に実際に触れてもらう事で、動きや重量、様々な材質の質感を触知してもらい、機能と装着方法やどの様な障がいに用いられるのか説明することで、障がいや義肢装具について理解を深めてもらう事を目的としました。

生徒はスタッフの説明に熱心に耳を傾けていて、大腿義足の重量に驚いていたり、切断された足は義足より重いと説明を受けると感嘆していました。

＜義肢装具触知体験の場面＞

パラリンピアンによる講演

アルペンスキー（チェアスキー）の選手であり、パラリンピアンの青木 辰子氏をお招きしました。「パラリンピック出場の経験」をタイトルに、パラリンピックへの出場経験についてと、青木氏のパラリンピック出場を支援された方々についてご講演いただきました。青木氏は競技活動以外にも、教育機関や社会福祉機関などでの講演活動にも力を入れており、障がい者スポーツの社会的意義について、独自の活動も行っています。

生徒達は青木氏の講演を熱心に聴き入り、質疑応答も活発におこなわれました。

講演後は代表生徒から青木氏に講演に対するお礼の挨拶と、花束贈呈が行われました。

＜青木氏の講演風景 ＞

義足ユーザー交流

下腿義足、大腿義足、上肢切断と下腿義足のユーザーと、3名の方々に参加協力して頂きました。ユーザーと交流することにより、実際に会う事や言葉を交わす事で「障がい者理解」を深めてもらう事を目的としました。交流では、大腿義足ユーザーによる階段を降りる動作や小走り、下腿義足ユーザーとバスケット部の生徒によるマッチアップ、サッカーのリフティングなどのパフォーマンスもおこなってもらいました。

生徒はユーザーのパフォーマンスを目の当たりにして、想像を超える活動度に認識を一変したようで、義足が見えなければ切断者と分からないと感想を述べていました。
ユーザーとの質疑応答では、生徒からは日常生活に関する疑問点や、義足で不自由な事について等の質問が挙がりました。

＜義足ユーザーとの質疑応答場面 ①＞

＜義足ユーザーとの質疑応答場面 ②＞

＜バスケットのマッチアップ＞

総括

今回初めてとなる「義肢装具体験イベント」を開催しましたが、多感な年代の子供達に障がい者とその方々を支援する義肢装具士の業務を伝える事は、「障がい者理解」や「ボランティアマインドの育成」、「義肢装具士の理解と将来の職業選択」に通じる、非常に大切な啓発活動であると考えます。

当協会では、これからも積極的に公益目的事業に取り組んで参ります。